

ひめまつ

第13号



須賀学園生徒会



ひ め ま つ



第 1 3 号

ひ め ま つ

第 1 3 号



目 次

巻 頭 言	……学校長 須賀友正	1
三大覇権樹立記	……横 山 生	2
バレーボール山形遠征記	……小野孝之	7
那 須(その二)	……井上悠逸	8
旅 と 食 味	……服部美登	11
寮 の 一 日	……手塚 米	13
ともだちの選択	……木村延子	14
私達の文集		16
私達の詩集		47
私達の句集		56
私達の歌集		57
思い出の旅より	……三 年	60
	……二 年	62
	……一 年	63
生徒会クラブ便り		64
昭和33年度学校行事		75
職員住所録		76
編集後記		76

優勝旗 (三大覇権独占)



第8回関東ソフトボール選手権大会

第10回全国ソフトボール選手権大会
第13回国民体育大会ソフトボール競技



優勝の感激をこめて (二荒山社頭)



日本スポーツ賞のソフトボール部選手



新装成れる家庭科特別教室



巻頭言

学校長 須賀友正

卒業式歌の練習が始まりました。……きれいなコーラスが植込みを縫って私の窓辺に漂ってくる。私はタクトにつれて静かに歌う女生徒の心の中を想像したり、この一年を顧みたりして今日もまた複雑な感情に浸って早春の空を見上げた。今年も色々な事があった。実科授業の殿堂としての家庭科特別教室が本校独自の設計で立派に竣工し、生徒達は青畳の香りもすがらしい和裁室や近代的な明るいミシン室で真剣に技を練っている。他校では見られないこの実技センターの落成も本年度の大きな収穫だった。又、ソフトボール部が選手達の日頃の精進と全校あげての応援によって輝く日本スポーツ賞を受けたのも更に国民として大きな喜びである。皇太子様の御婚約の朗報を聞いたのも、この年であり昭和三十三年の特記すべき感激であった。こう思い、教えあげる時、過去の一年、一言に言い捨てるには余りにも貴重な価値のあることをつくづく知らされる。一年生が二年生となり、二年生が三年生となり、そして果立って行く、と言うごくありふれた日々の中にもきつと見逃すことの出来ない何かの価値のあることをもう一度振り返って見て貰いたいと思う。

私がよく申す「一人は一人を代表する」と言う言葉も、生徒の一人一人が夫々に本校生徒としての価値を知って、その価値を自分で見捨ててはいけないう意味です。それほど「一人」と言う人間の価値を見逃して貰いたくないのです。皆さんに夫々個性があると同時に、夫々の価値が皆さんにはあります。或る人には無価値なものが他の人には重大な価値である場合もあり得る。皆さんがその各々の価値を出し合って暮らして行ったら、世の中はまたどんなにか値打ちのあるものになるかわからない。価値を自覚する心こそ、人間の大きな喜びであり、幸福への素材だと思います。学校はその価値のあり場を皆さんに認識して貰い、価値のあり方を勉強して貰う修業の場でもあります。

学校を巣立つ時には立派に自分の価値を認識して行つてこそ始めて目的が達せられた訳です。そう言う意味で「ひめまつ」の中におさめられた皆さんの作品が、夫々に自分の値打ちを、おおらかに探求し、歌いあげるものであって欲しいと思う。

悪い事――
それだけによつて物事の価値はきめられない。価値こそはその人のその時の心の中にだけ存在するものだ。健全な価値を育てるために、健全な心を育てよう……。

と、こう念じて力強く羽ばたく新卒業生の門出を祝う言葉とする。



日本スポーツ賞



トリプルクラウン賞
(三王冠賞)



文部大臣トロフィー 国体優勝杯



全日本優勝杯

三大覇権樹立記

横 山 生

本校ソフトボール部は全日本選手権大会、国民体育大会及び関東大会の三連勝に加えて県下大会九連勝と悉く全大会を優勝し、向う所敵なしの、いわゆる史上不滅の金字塔を樹立した。それは不撓不屈の伝統とも言うべきか、雨の日の練習より雪の中のトレーニングの苦難を乗り越えての栄冠であり、その涙は輝ける歴史の一頁と共に、感激を身にしめる各大会の経過を簡単に記することにする。

※第十回全日本選手権は八月三日より四日間兵庫県西宮球場で行われた。本校はその県予選を一回佐々高を〇―〇のスコアで勝ち、二回は中央女高を九―〇。三回戦は作新を二―〇のスコアで。決勝は大女高を六―〇の破竹の勢いで栃木県代表となった。バレーボール部の全日本大会（山形）での敗戦を聞いて、山形の仇は西宮と勇躍八月一日早朝宇都宮駅を出発した。東京九時半の急行で夜の九時宿舎宝塚温泉の相生楼に到着した。全日本は出場五回で殆んどこの宿を利用するので気楽な一夜を過ごした。世話係としての新井先生、助監督の代田先生は何やこれやと選手の些細な点にまでの看護や世話を尽せば、選手はこの世の春とばかり大名生活を謳歌するとは言い、その生活の一つ／＼に必勝の節度が滲っていた。

一回戦は不戦勝で各チームの戦法と技術を見学した。北は北海道より南は鹿児島からの精鋭四十六校の県代表と昨年の優勝校を入れたのチームには様々な方式と色彩をもっていた。

武者振いというか、コンディションは最良であった。二回戦は地元兵庫県尼崎北高で、球歴とファイトについては関ヶ原戦である。実力伯仲の手に汗を握る試合である。先攻の本校は六回に二死走者三塁の時幸運に恵まれ辛くも貴重な一点により敗った。本校応援は校長先生、牧野先生及び大塚会長さんだがこの時甲子園初出場の作新野球部の応援を頂き厚く御礼申上げる次第である。

三回戦は宮崎県富島高で本校の先攻は立上りから攻め三塁打を始め長短打の集中に全くノックアウトの大量得点即ち十一―〇で圧勝した。この時の阿久津投手のダイナミックなピッチングと、それを良くバックアップして、ノーヒット、ノーラン、ノーエラーの全日本大会初のパーフェクトゲームを樹立して、その威容を全国に轟かせた一戦でもあった。

四回戦は埼玉県大宮高で此処に関東の両雄が覇を競う運命は惜しむべき感を呈する程、両軍チャンスがない。漸く後攻の本校は四回二死浪辺三塁のとき大塚の強引なスクイズバンドの奇襲に一一―〇で貴重な勝点をあげた。

準決勝は静岡女子商業だが尼北戦に比較して余裕をみる事が出来た。それは大会の雰囲気になれた事は勿論だが、何か悠然たるものが滲っていたからである。昨年もこの準決勝で敗退の苦杯をなめ、今度こそ挽回すべく闘魂は充分備わっていた。一戦一球主義は勿論で正攻法で一点々と三点をリードした。

相手も準決勝に進出するだけあってその粘り強さは学ぶべきものがあつた。最終回に一点を献上して、県予選より全日本終了まで本校が許した点数はこの一点である事を考えれば誠に残念なものである。

決勝は呼吸さえ苦しい程の強い夏の太陽の直射を受けて午後一時広島県安田女高と開始した。ソフトボール界の名門校だけ本校との過去の試合成績は三勝三敗。これまた決勝でもある。先攻の本校にも、互にチャンスはなく投手戦を展開して三回は隣り間に終り四回裏に重大なピンチに襲われた。二番打者の無死安打に出塁、三番の儀打に走者二塁。続いて四番打者の出塁に一死二三塁の全くの悪条件に迫った。勝つも負けるも観衆にとっては興味ある瞬間だ。五番には敬遠の四球で一死満塁。此処に一つとして許せない失策と安打である。本校ナインは死力の奮闘に六番は粘るハルポール六本後サードフライに倒れた。

勇気百倍と共に安堵の息をついた。その僅かな隙に三塁走者は脱走のようにホームスチールを敢行したが寸前でタッチされ、スリーアウトが容赦なく宣言せられた。こうして攻防戦を展開しても本校にとってはチャンスらしきものがない中に延長戦に入つた。この時バンド戦法に移った本校の七番打者の無死一塁に続いて八番九番の見事なパンチに敵の内野陣は全く混乱。束の間に二点、続いてトップとの間にスクイズに一点を加え、一回のチャンスをも有効に生かし三対〇で須賀高の優勝がなし得た。夢ではないか。碧空に舞上る白雲のように抑えることの出来ない歓喜に、恥の知らない幼児のように彼女達はその感激に咽んだのである。勝負の世界は何処に因果律が存在するのか、精神・技術・作戦・後援等を考える時斯くも悲喜それ／＼の分岐となる事を痛感した。海老茶の大優勝旗、それに銀色に輝く大臣トロフィーは初めて

箱根の山を越え関東に。須賀高に來た訳である。勝つて兜の緒をしめて八月三十一日の県大会にも優勝し、続いて団体栃木茨城予選にも圧勝し八年連続団体出場権を得た。

※第十三回国民体育大会は天皇皇后両陛下の行幸啓を仰ぎ立山連峰の麓越中富山県下に全国民のスポーツの祭典が挙行された。

十月十七日早朝宇都宮駅を後に勇躍征途についた。ソフトボール会場の立山町についたのは夜の九時頃、町民の出迎いを受けて旅の疲れを吐いた。北陸の静寂な田園の中に建つ釜ヶ淵小学校。そこが私達の宿舎である。朝から晩まで婦人会を始め村民の歓待には団体遠征に例を見ない程だった。十九日は総合開会式で全員富山市の県営グラウンドに向った。市内はすべて団休色に飾られ全県あげてのお祭り騒ぎで、学校は勿論全部休みだ。既に観覧席は立錫の余地もなく、その上富山大学の屋上には鈴なりの見物人である。文部大臣と御同行の副校長の須賀淳先生もお出になられた。PTA大塚会長さん、斎藤先生、新井先生も観覧席に入った。

豪華絢爛たるマスゲームは「うっとり」と感服するうちに、ブラジル邦人を先頭に沖繩より北海道までの選手団の堂々たる入場行進が始められた。グリーンのジャンパーに白スポンの本県選手団は菅沼団長以下二百数十人が歩武堂々と入場した。数百人の奏するブラスバンドは高らかに響きわたる。天皇皇后両陛下の御臨場を仰ぎ大会の幕は開かれた。

万雷の拍手に迎えられた聖火。そして宣誓に新たな感激を覚え「参加する栄誉」とは斯くの如きかと思わざるを得なかった。一回戦は不戦勝であつたので宿舎の釜ヶ淵小学校で練習した。

二回戦は山口県野田学園高校である。二県から一チームの代表校はまさに強敵揃いで、合せて二十五校が一木勝負によって覇を争う、闘魂は燃え上り、一回戦より此処彼処で延長戦が頻りに起つ

全く同じであつた。

※第八回関東大会は桐生市で十一月八、九の両日行われた。年間二つのタイトルはベストコンディションにあつたが阿久津投手の怪我は大きな障害となつた。然しそれに代る鈴木投手の攻守の活躍に一回神奈川高浜高を七―一で破り、続いて山梨湯田高を三―〇で破つた。

隼矢勝は温存の阿久津投手を再び東京神田と類を合せた。事実

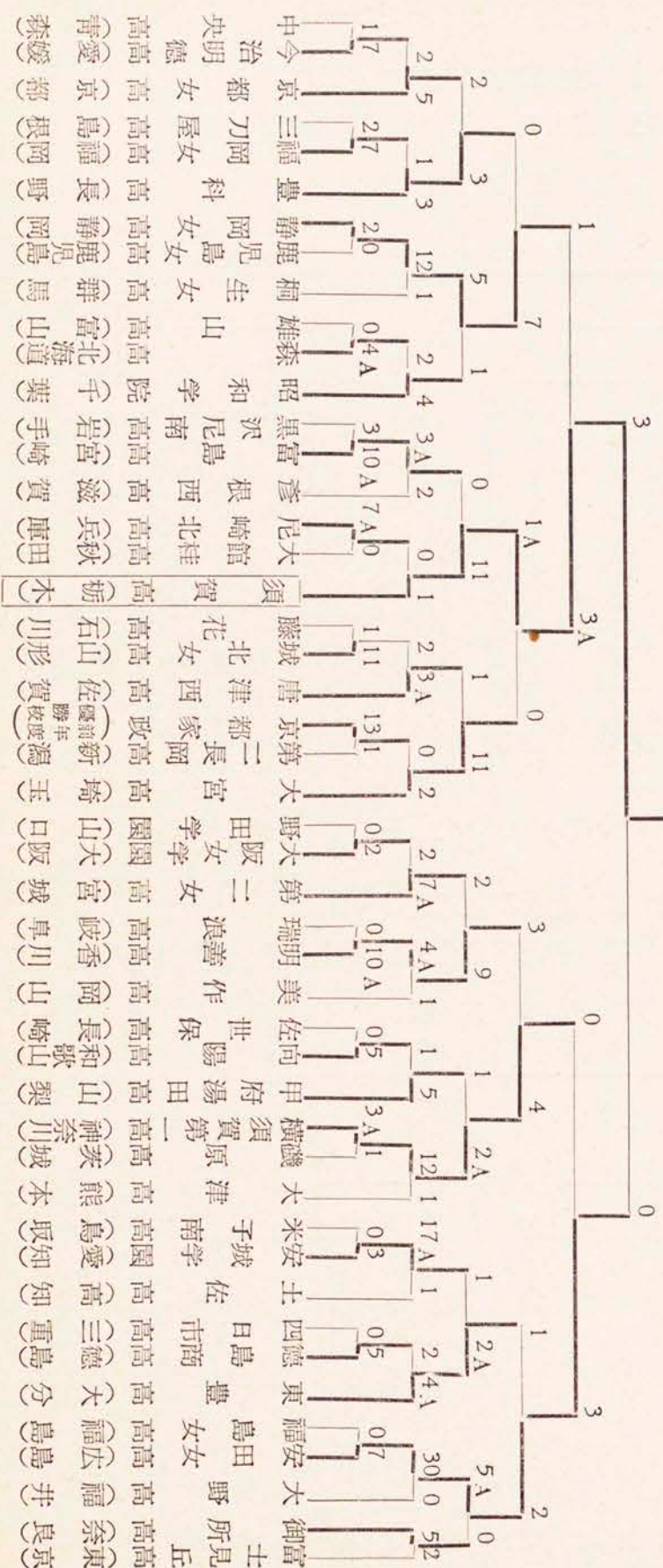
準決勝は温存の阿久津投手で再び東京神田と顔を合せた。事実上の決勝らしい白熱戦だったが曲山の出塁から鈴木本の三塁打でこれを破った。決勝は群馬沼田高とは小雨降る新川球場で本校の先攻から開始されたが、後半の猛攻は郷間の本塁打、鈴木本の三塁打等の長短打で五—〇で優勝した。此処に三年連続の榮譽と有終の美を飾り、輝く三大覇権を樹立したのである。斯くて読売新聞主催の日本スポーツ賞を受賞し、高校日本一として天下にその存在を大ならしめた。校庭に毎日いらっしゃる校長先生の熱意と、大会統導の先生方の御苦勞を謝し、蔭となって御尽力下さる全職員父兄各位、生徒諸君に厚く御礼を申し上げます。

左翼	遊撃	三塁	二塁	一塁	捕手	投手	監督	監督
小島	大塚伊佐子	篠崎喜代子	渡辺タイ	郷田久ネ	吉野久子	阿久津牧子	代田照子	横山生
房2年	3年	2年	3年	3年	2年	3年	子	子
記録	ク	ク	ク	ク	ク	補欠	右翼	中堅
大島美登里	高瀬太平洋	増渕功子	鈴木弘子	菱沼映子	松本セツ	青木セツ	浜崎マツ子	曲山ユミ子
2年	1年	1年	1年	2年	2年	2年	2年	3年

全国再制覇への道

(昭和33年8月3日～6日・西宮球場)

校高賀須勝優



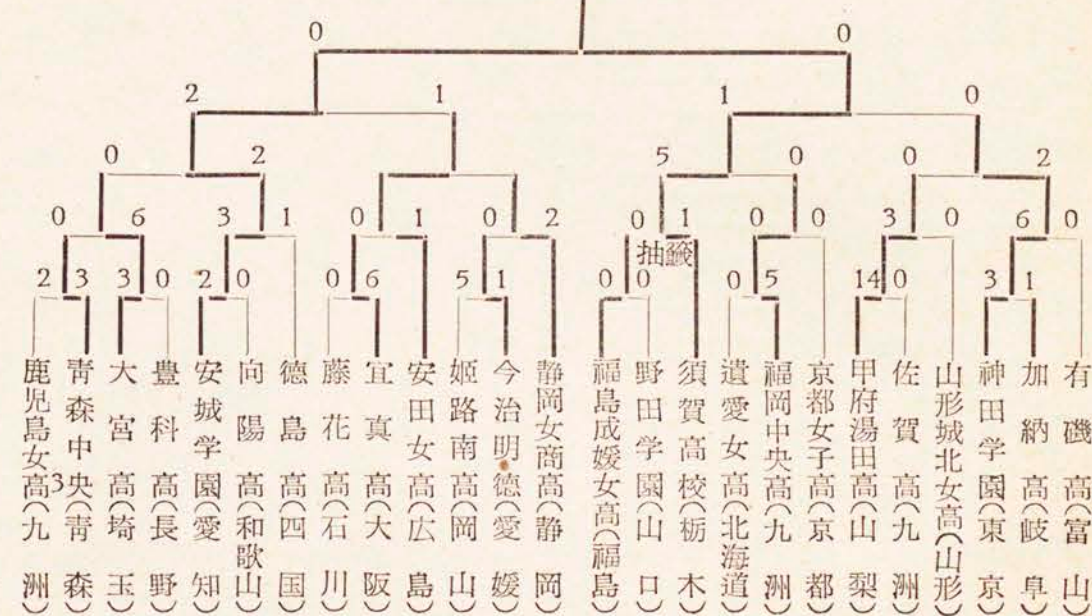
小野孝之

そして次の全日本予選を目指して毎日々々暗くなるまで激しい練習に励み県下の強敵栃女高、中央高を軽いスコアで破り、遂に前年度に引続き優勝。

そして復活戦福島代表湊成女高と対戦することになったが不運にも雨天止むなく競技は体育館で行われ、本校にとっては屋内戦は一番苦手だった。しかしどうあつてもこの一戦には勝ち残らねばならぬ。本校は、この一戦に勝つて、決勝戦に進出する。決勝戦は、本校は、この一戦に勝つて、決勝戦に進出する。決勝戦は、本校は、この一戦に勝つて、決勝戦に進出する。

会 場 富山県立山町雄山高校校庭

校園 高學 賀城 須安 優勝



第8回関東ソフトボール選手権大会

会 場 群馬県桐生市新川球場

優勝 須賀 高校

